

柔軟な表現を取り戻す取り組み 1

The curriculum which regains flexible expression (Memoir-1)

福岡 龍太 *Tatsuhiko Fukuoka*
(人間発達学部)

小さいときは・・・

幼児期に自分が描いた絵を成人になってから真似ようとしても決してできるものではない。「あーこんなの作ったなあ」と過去の自分に出会ったとき、「よくこんなの作れたなあ」と感心するだろう。誰かに教えられたわけでもないのに、自らクレヨンを持ち、慣れない手つきで切り、貼って、そして多くの傑作を作ってきた。それは、なんとなく人の顔に見えたり、どことなく風景に見えたり。“自由”に熱中できるいい時代であったことには違いない。

美的感覚の萎縮

4, 5歳あたりから人物像の頭髪を描く際、躊躇せずに黒を選択する子供が増える。小学生になれば、肌の色は「はだいろ」と表記してあるものを探す。地面が茶色で空は水色。流れる川面は空が映りこむため水色。ほとんどの児童は疑うことなくその色を選択する。義務教育における作品の評価は自分の成績に反映されるため、次第に模範作品を見ながら、それに近く「上手に作る」ことに専念してしまう。奇抜な色彩や形を個性として認識されにくいために、人とちがった行為がいけないことのように思ってしまう。周囲を見回しながら足並みをそろえた作品は、安定した成績を得るための手段であり、幼少期の元気な作品は、進級するにつれ、味気のない姿に変化してしまう。その結果、図工がおもしろくなり、そしてきれいになってしまう。



図 1

“美術がきらい” から “面倒くさい” に

こどもが好きで、将来幼児教育に携わりたいと専門大学に進学する学生のほとんどが、すっかり図工が大嫌いになっている。何とかしたいと思っても、いまさら何をすればよいかわからない。工作をする準備が面倒くさい。手が汚れるのもいや。さまざまな負の要因が重なって、それは深刻な状態である。しかし、教育者になるためなら苦手を克服しようと高い志は失っていないため、1年生の前期に効果的な改善策を具体的に展開しなければならない。

はじめは我慢して見守る

固定概念で思考がカチカチになっている現状をしっかりと把握し、それを打破するための最初の取り組みとして「らくがき」をさせる。大きめ紙 (A3 程度) に自分の好きなことなどを自由に描いてと伝える。好きに描いてもいいことにはじめは戸惑い、さまざまな質問をしてくる。

「たて描きですか、よこ描きですか？」

「人間を描いていいですか？」

「どれくらいの大きさに描いたらいいですか？」など

「自由」を自由に解釈できなくなって、領域や制限を探そうとする。またそれがあることに安心し、結果的に視野が狭くなり動きがとれなくなっている。これらの質問に対しては「あなたの好きなようにしてください」とだけ答える。教員は学生の困惑した表情を見て、いろいろ助言してしまいがちだが我慢して見守る。次に学生たちは周囲を見まわし仲間に聞く。「どうやって描く?」「これっていいかなあ、大丈夫かなあ?」このように周囲と歩調を合わせようとしたり、自分の表現が“正しいか”もしくは“低評価にならないか”を他人に確かめようとする行為は、冒頭に述べた点数で評価される図工からの防衛本能であり、本来の表現をさせづらくしている。この様子を見て教員はいよいよ「自信を持って描きなさい」、「人の意見を求めず自分で考えなさい」などと注意してしまいがちだが、ここでも我慢をしてそのまま見守る。

しばらくすると、「好きなことを自由に描けばいいんだよ」と言いながら携帯電話で思いついた関連画像を検索し、好きな食べ物やかわいいデザインの洋服を描きだす。誰かが開き直って描くと、一斉に連鎖反応を起

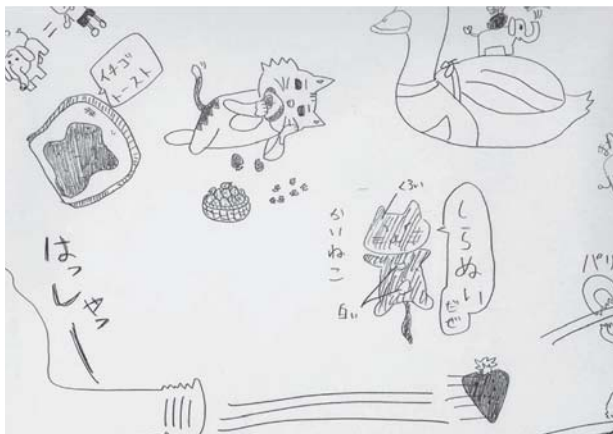


図2 らくがきは絵を描くことが好きになる第一歩

こす。大きくて白い紙があつという間に埋まっていった。決して写真のような精密さや上質絵画の趣は感じられない。しかし元気な鉛筆さばきは、楽しみながら“らくがき”をした証である。好きなものを自由に描く喜びを少し感じてくれたはずだ。

自由に発想、表現できる環境は、まず教員が押し付けることを我慢し、学生自身で意識改革するまで待つことで、それは得られる。技法やテクニックを教える前に行なっておきたい大切なことである。

らくがきを発展させた授業

- ・ A3用紙を1枚配布する。
- ・ いろんなジャンルから5項目を選ぶ。(衣食住に関する物の他に生き物や嗜好品など)
- ・ 「うまく描かないで」と伝えスタートする。
- ・ 形式や使う文具は自由。
- ・ 30～40分で完成

はじめはA3の紙が非常に大きく感じてなかなか描き出せないだろう。「上手に描こうと思わないで」と何度も伝え、じっと待つ。一度好きなものを描いているので描き出しは早くなっているはずである。展開をそっと見守る。

細く短い薄い線をまるで毛が生えたようにたくさん組み合わせ、探りながら形をとる様子をよく目にする。自分の形取りに自信がない場合が多く、うまく描こうとするために暗中模索しているのだろう。そのような学生には「上手に描かないで。形がくずれた方がおもしろいだから」とつけ加える。何度も描くうちに力強い線が引けるようになっている。うまく描かなくてもいい環境は、安心と自由をもたらしてくれる。

毎回出来上がったものの中からおもしろい部分を探す。ここで挙げたおもしろさとは、着眼点や展開の意外性、好奇心の大きさのことである。過去の経験や知識から生まれた発想も、教員が見落としてしまっただけとはいけないので、引き上げる側の思考は相当に柔軟でなければならない。“おもしろさ”をたくさん見つける楽しさはこの授業の醍醐味である。

わずかなきっかけ

犬を描いてみてと言われれば「絵が下手だから無理」と思う。そしてなにより面倒だと感じる。ならば「犬」と聞いて何を連想するか?と問いかけると「肉球」とか、「首輪」などと具体的な形を答える。ごはんを食べさせるときは器が必要であるし、好物は漫画に

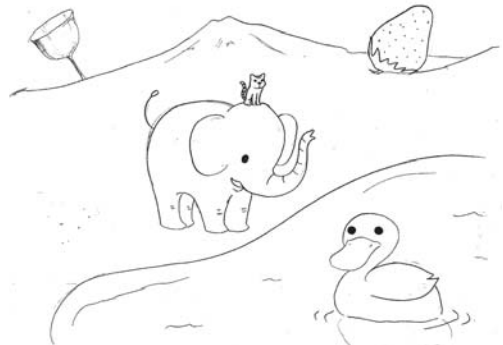


図3 まず大きさやバランスを気にしないで描く

でてくる「あの形」の骨だと思う。リズムカルに散歩をしている犬の様子は容易に想像ができる。犬小屋から顔を出した愛らしい表情、嬉しさ余って飛び掛ってくる姿。午後の暖かな日差しを受けながらの昼寝・・・

犬をキーワードに発展させたイメージがここまで広がれば、その様子を“らくがき”してみる。それは描いた本人しか認識できないような絵かもしれない。でも、それでいいのだ。

ここで言う小さなきっかけとは連想させることであり、それを学生に投げかけることは教員の責務だと考える。それは押し付けにはならないし、出てきたイメージに不正解はない。すべての展開はその学生の個性であり、尊重しなければならない。小さなきっかけは幅広い自己表現を可能にする。

喜怒哀楽とは主にヒトが持っている特長であるが、初等教育では生物以外にも目や鼻、口をつけてそれを表現しても良いと思う。幼児に人気がある漫画では、ふんだんにそれが用いられ、親近感が増す。学生にはモチーフすべての表情を大切にすることを、この“らくがき”で培ってもらいたい。

最近の学生は鉛筆を使わない。シャープペンシルのほうが使いやすいのだろう。しかし絵を描くときにはB以上の濃い鉛筆を使用するよう心がけたい。濃く描いたものには強い存在感、鉛筆の線がもたらす生命力には迫力がある。見た人に与えるインパクトは大きく、深く印象に残る。また、輪郭だけではなく、色のあるものは塗りつぶすようにしていきたい。

見分ける

「好きに描いて」と伝えたと、ダイナミックに描きまくる学生がいる。時にそれは乱暴な見え方をする。その境界線を見分けることは非常に難しく、“なぐり描き”の中におもしろさが潜んでいる場合もある。魂を見出すことは至難の業だ。

以前、おもいっきり描くことが乱暴になってしまう学生に丁寧に描くように促したことがあった。しかしその直後から授業に来なくなってしまった。のちに本人と話すことがあ

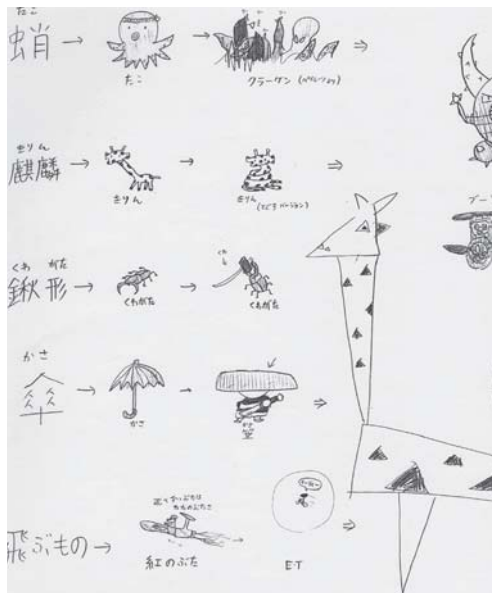


図4 発想の展開を絵にしてみる

り、それについて聞いてみると、それが自分であり、そこを否定されたら自分の存在が否定されたような気になって授業に出づらくなった。と告白された。

美術表現とは自己表現である。決して否定をしてはいけないとそのとき深く反省した。それから数年後に同様の学生に会った。筆跡は実に荒々しく、何が描いてあるかわからない元気の良さだった。今度はそれを正すことはせず、しばらく見守っていた。毎回どこかにおもしろい要素がないか紙面上を探しまわったが、なかなか発見できなかった。

あるとき「飛行機」という題を出したら、小さな窓が紙の端から端まで一列に並び、すべての窓から乗客がこちらに向かってピースらしきポーズをしている様子を描いた。紙全体が機体に見え、本物の飛行機がいるかのような迫力を受けた。それを高く評価したらその学生は「いつもグチャグチャに描くからたまには整理しようと思った」と言った。

描きすぎるといふことは、それだけ伝えたいメッセージが多いということだ。自分で必要、不必要を見分けた結果、すっきりした表現ができた。見分けることは教師の役目ではあるが、学生が自発的に身につける場合もある。私は前者の学生に押し付け教育をしてしまったために、見分けるチャンスを奪ってしまったのだ。

空間（位置を感じる）

単体で描くことが楽しくなると、それらを組み合わせたくなる。寄せて描くのではなく、思い切って重ねてみると、そこに空間（奥行き感）を感じることができる。その際にひと手間加えると見え方が劇的に変化する。

- 1) 2つ以上の固体を重ねるように描く
- 2) 重なった部分のどちらかの線を消す

線を消すと、消した部分が手前に見え、消された部分は奥に引っ込む。たこの足も前後の奥行きが生まれ、格段に見やすくなった。

(図5)

線が交差する部分には、きちんとした処理が必要で、消し残りがあると立体的には見えない。微調整をしながら精度を高めていきたい。

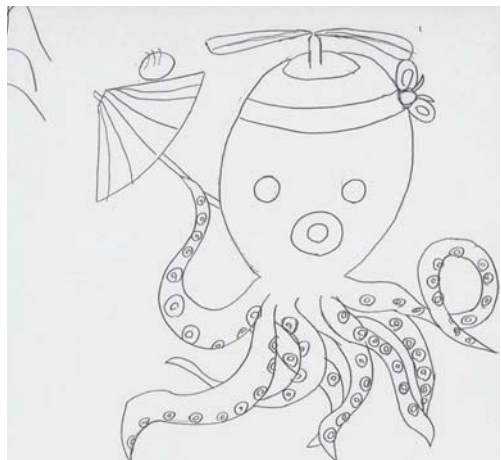


図5 前後関係がわかる足

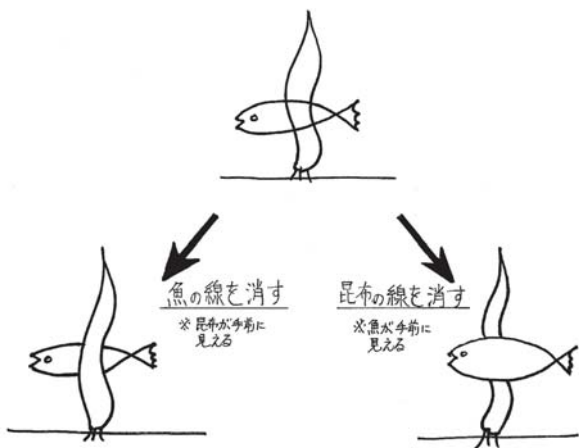


図6

“線を消す”とどのような効果が得られるか、黒板を使って具体的に指導する。失敗=消すというのが今までの考えであるが、絵を描くときには「消すことも描くことである」と伝えたい。

消すと見えてくる位置関係を黒板に描くことで、学生はそれを真似し理解してくれる。

(図6)

サンプルは単純な形のほうが学生に伝わりやすく、また真似しやすい。これを理解しマスターすれば、描くのがますます楽しくなる。

まじめにほめる

自信を持って描けたものほどほめてもらいたい。教員はそれらの作品だけに注目してしまいがちであるが、自信なさげで、隅に薄く描いたものの中にも傑作はある。是非それに気づき、大きく評価できるように心がけたい。時にはだめだと思いついてしまった筆跡におもしろさが満ち溢れている場合があるので、神経を使って発掘したい。その基準は無限にあるがゆえに、ほめるときには具体的な言葉で真剣に伝えなければならない。作品をしっかりと見て、褒めたい部分のみを探す。制作すればするほど楽しくなる環境に、負の要素は必要ない。

偶然描いたものが美しく見えることがある。残念ながら本人は、その形に興味があると気づいていないことが多い。「これはおもしろい、よく思いついたね」と話すと「たまたま。何も考えなかった。ほめられるとは思わなかった」と驚いている。しかし「これでよかったのか」と認識できれば、次からそれを基準に再現しようと努力をする。ほめられて気分が良いため、またおもしろいものができる。きちんと褒めることで自分の表現を徐々に確立し、気持ちの高まりがゆるぎない実力に変わる。

描くのが楽しくなる真髄

発掘したおもしろい絵を広くみんなの眼に触れるようにする。吟味した絵を毎週編集して作品集を作る。もちろんバランスの取れたきれいな絵を描く学生もいれば、ダイナミックで元気あふれる不恰好な絵もある。小さく、薄く、自信のなさが伝わってくる絵もおもしろければどんどん掲載する。その作品集にコメントを書き込み、次回の授業内で配布す

る。アイデアが沸かなかった学生はそれを参考にし、今後の制作に役立てる。

作品集はあくまでも参考資料であり、優秀作品だけで構成されているわけではない。表紙になる絵は、図画工作にまだ苦手意識を持っている学生に、勇気を与えるものを選ぶ。それは完成度が低いものになるが、きらりと光る魅力をどこかに含んでいる。表紙はその魅力を引き出すスペースであり、表現能力が弱い学生には、そこに自分でも描けそうだと感じるものが載っていれば、自信を取り戻すきっかけになる。掲載されたものと自分の作品を比較し、不足している何かを知る絶好のチャンスなのである。

掲載する絵の作者名は記載しないほうがよい。絵だけに集中して冷静に閲覧することができるからだ。

作品集を発行すると、次は載せてもらおうぞ!と楽しく意欲的に描く学生が増える。柔軟な思考が大切だと感じた者は「これはだめ?」から「これはおもしろい?」と質問が変化してくる。その環境は大変喜ばしく、いつまでも持ち続けて欲しい心である。



図7 イメージのふくらみが絵をおもしろくする

1年次に実践する理由

ある日、学生が告白をしてきた。

小学生のときに、近くのお寺へ写生に行った。その日たまたま行われていた造園業者の剪定風景を描くと、担任から「それは写生ではない」と怒られた。そしてそれ以来、図画工作が大嫌いになった。写生とは、あるがままの情景を色彩や形を持って表現することで

あり、その剪定風景は紛れもない事実である。当時描いた絵を見せてもらったが、4人の職人の背景には立派なお寺の屋根が堂々と描かれていた。担任は目的の建物を描かないで「余計なもの」を描いたからだめだと判断したのだろう。それにより着眼点のおもしろさは消されてしまった。

ここでの問題は、ひどく叱られた理由に対して、本人は10数年経った今でも納得していないことである。担任が設定した図工の評価基準は、お寺がメインで描かれたものが高評価で、それ以外は対象外になっていたのであろう。しかし「今日はお寺の様子だけを描きましょう」なら仕方ないが、「敷地内を自由に散策し、好きなところで描きなさい」と言われたのならば、忠実に描いて叱られたことに到底納得はできないだろう。

国際結婚が珍しくなくなった昨今、地方都市にも多くの外国人が住んでいる。日本が好きで住み続けていくうちに家族が増えた。子供が幼稚園に通うと、父の日にはお父さんの、母の日にはお母さんの似顔絵を描いてプレゼントする。親は大変喜ぶので、職員も制作指導に力が入る。

あるときベテラン保育士が「来週の父の日にお父さんの似顔絵を描いてプレゼントしましょう」と言いながら、大きな画用紙を配った。そして描き始めようとしたとき「髪の毛は黒色です。みなさん、黒いクレヨンを持ってください」と発言した。「次にかおを塗りますので、肌色を持ってください」「黒い眉毛をかいたら、目玉も一緒に塗りましょう…」その指示に従った子供たちの作品は皆同じ顔をしていた。私の前に座っていた青い目の女の子は「私のお父さんの顔じゃない!」と困っていた。

教育者の都合で子供が振り回されることがある。子供は大人の言うことを素直にきかなければならない。このような一方的な教育が意外に多く発生しているのである。

教育者はこれからも子供を評価しなければならない。図画工作における表現の本質を十分に理解しなければ、将来学生は子供の発想をつぶしてしまうかもしれない。過去に固定概念による押し付け教育を受けたのならば、それを繰り返さないよう断ち切らねばならない。着眼点のユニークさや、好奇心を早急に取り戻せる環境づくりは、大学生活で改善できる。長所を探す姿勢は1年次から重要となり、それだけが表現の評価だということを知ってほしい。それを正しく察知して、広く公表する能力が身につけば、すばらしい表現教育になるはずである。

落書きから作品へ

楽しいことも慣れてくると飽きてくる。単体画を複数回描くと、そろそろマンネリ化して制作意欲が落ちる。第2段階のカリキュラムでは、今まで挙げた項目を複合させた環境、空想や理想の世界を描けるようにする。

- 1) 単体イラストは初期段階で60項目程度習得している
- 2) 60項目は陸海空の乗り物、動物、植物、食物など幅広く選出した
- 3) すべての物に表情をつける能力は備わっている

以上のことから、任意の世界を表現してみる。既に想像力を取り戻しているのも、思い浮かぶアイテムは豊富である。そしてそれらの位置関係もおおよそ描き分けられる。

紙を配り、テーマをひとつ出す。○○の様子（○○は海や山といった大きな範囲）
 使用文具や方法は自由。学生はテーマから想像するモチーフを探し出す。それらを次々に画面に構成していく。しばらくすると描きたいものが多すぎて画面密度が高くなってしまふ。そこで「落書き」から「作品」に意識を高めるために、見やすくする「ひと工夫」が必要となってくる。

- 1) メインとなるモチーフを決めて、それを少し大きく中心あたりに描く
- 2) そこからストーリーを展開する
- 3) 画面の8割ほどが描けたら終了する



図8 課題：海の様子 80%の密度が見やすさにつながる

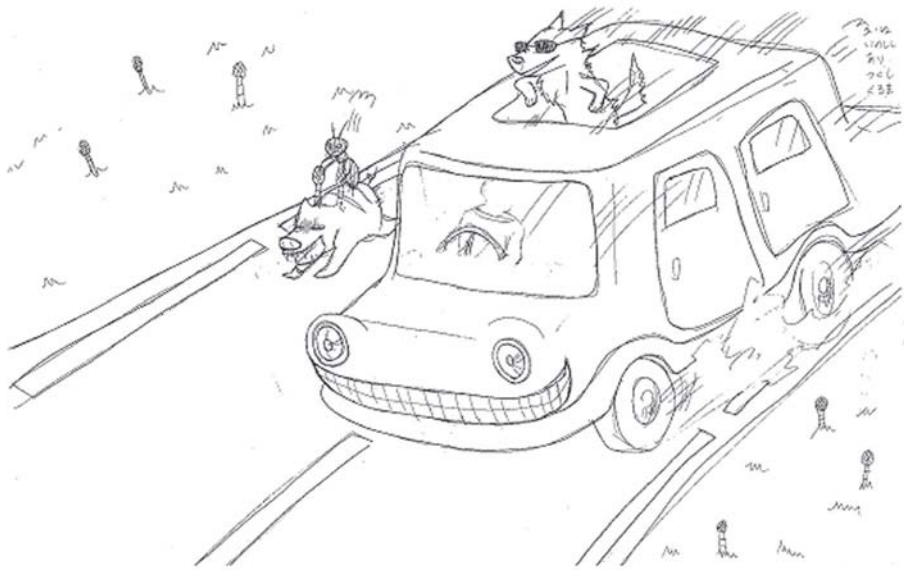


図 9

完成した「作品」は迫力、バランスともに優れ、大変見やすい画面になっている。決して精密に描写されたものではないが、描いた学生の人柄が感じられる作品に仕上がっている。(図 9)



図 10

図 11

現実にこのような世界は存在しないが、こんな世界ありえないと切り捨ててしまわずに、学生が楽しく描いた証を高く評価したい。(図 10, 11)



図 12

ご飯と味噌汁の位置が逆に思えるが、パンダから見たら問題ない。描いた学生はナイフとフォークを持つ手も意識していた。「このパンダ、左利きなら食べることはできないね」と周囲に話すと、みんなで食事をするふりをしながら確認しあっていた。(図 12)

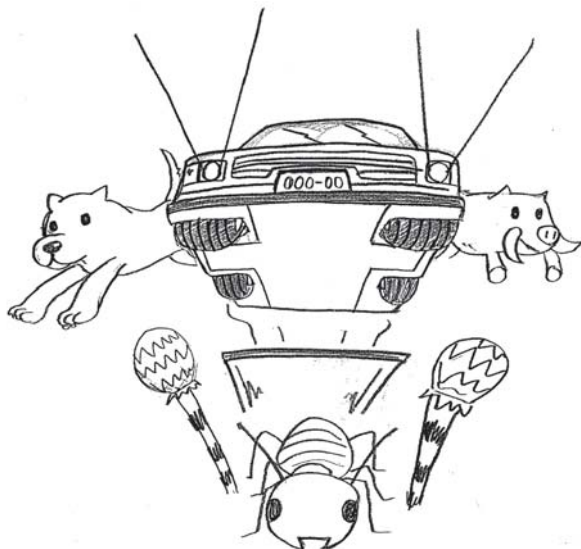


図 13

デザイン的にモチーフを組む学生も多く、インパクトの強さを感じる。(図 13)

日々の過ごし方

図画工作の授業において疑問に思うことがある。

アイデアは決められた授業内で浮かぶものではなく、日常のふとしたときに沸いてくる場合が多い。しかし授業内で考察し、それを形にしなければならない。案が思い浮かばない日もあるだろうし、体調や季節によって意欲の変化もあるだろう。この悩みを少しでも解消するために学生にある提案をしている。

携帯電話が学生にはほぼ 100% 普及している現在、カメラ機能を駆使して日ごろから記録するように伝えている。気になるものはすべて撮ろうと意識を持つと好奇心も広がる。そして些細な事柄を見逃さなくなる。撮った写真はそのままにせず、パソコンに移しかえるなどして管理する。そしてこれを活用すればアイデア不足を補うことができる。たくさんの資料は財産である。

まとめ

1 年間カリキュラムに取り組んだ学生は、ほぼ全員次のようなコメントを口にする。「はじめは A3 の紙がとても大きく感じたが、今では小さすぎる。描くスペースが足りない」

図 14 は 4 月に描いた、ある学生の絵である。細かな線で輪郭を模索しながら、単体のみを描く。画面のバランスは悪く、絵を描くことが好きだとは感じられない。年間カリキュラムに取り組んでいる 11 月頃には図 15 の絵が描けるようになった。もっと大きな紙にも堂々と描くパワーを感じることができる。個々の表情は生命力があふれ、今にも動き出しそうな雰囲気が漂っている。

この例はカリキュラムに“楽しく取り組んだだけ”であり、特別なことはしていない。また、誰もがこのような結果を得ることができる。

初等教育者を目指す学生が、自己の表現を確立すれば、人を正当に評価でき、目標に一步近づけるはずである。子供から信頼される教育者がたくさん輩出されることを心から望んでいる。

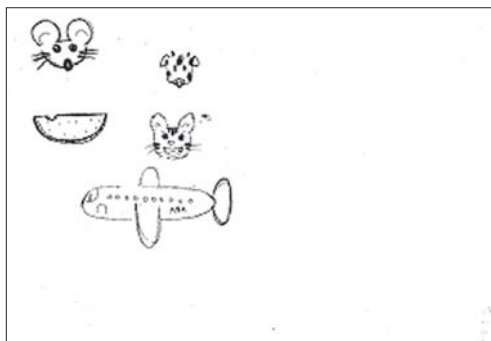


図 14

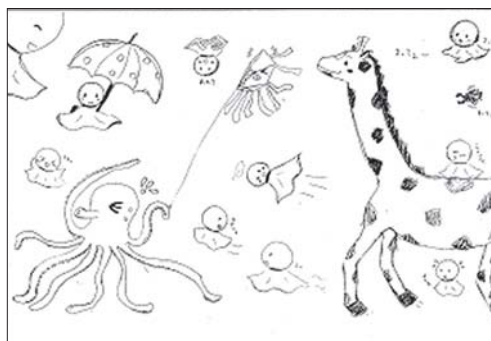


図 15

人間発達学部 造形実技1 鉛筆画カリキュラム
2007年度から2010年度までの研究報告